

## ジマンガ：日本人の心像的自尊心を測る試み

武本 Timothy

近年、日本人の自己評価があまりにも低すぎて大きな社会問題であるという見解が表されている。本論では、日本人の自己表現の媒体は言語ではなく映像であるという仮説を、自己肖像画（ジマンガ）を使って実証的に検証した。そこで、第三者によって評価されている日本人大学生のジマンガは言語的自尊心よりも友人関係の肯定的さを予想している結果が得られた。また、日本人男性の大学生のジマンガの高さは、友人関係の肯定的さと有意な相関をもっていることが分かった。これらの結果から、日本人の自己肯定感が映像的自己表現において表されているので、日本人の言語的自己評価が低いということを心配・是正する必要がないと論じた。

### まえがき

日本人の自己評価の低さがマスコミや心理学学界で注目されている。政界でも、安倍総理（2013）は「自国に誇りをもっている」というアンケート項目を肯定したのは、アメリカ人の高校生の7割以上であるのに対して、日本人の高校生の「半分しかいない」（同上、p207）ということに驚き、その結果をもって自信と誇りがもてる『美しい国へ』と日本を導くことを政治的なビジョンとして掲げている。

「日本古来：心像的自尊心の可能性」（武本, 2017）では、日本人の自己評価が欧米人にとって歴史的にどのように見られてきたかを紹介してから、矛盾しているように見えた日本人の自己評価には低い言語的自己評価と、高い心像的自己評価という2種類の自己評価を含んでいるという可能性を提案した。本論ではまず、日本人の自尊心についての社会心理学における学説を紹介してから、その可能性を検証する。

学説の紹介に入る前にひとまず2つの事実に注意を呼び、論文全体の目標を明確にする。事実の1つは、現在でも欧米人と日本人の自己評価の比較が、国内外の学者によっても継続されている。もう1つは、これから紹介す

る学説も、歴史的な記録（武本, 2017）で見たように、お互いに矛盾しあっていると見える。そこで本論では、学説にも見られる矛盾も、武本（同上）で提案した「2種類の自己評価」仮説で解消できると論説することを目標とする。

それでは、日本人の自尊心についての社会心理学の学説は、（§1）欧米の自尊心研究を日本で応用し、日本人の自尊心があまりにも低いとする「《一般心理学》<sup>1)</sup>」的見解、（§2）日本人の自己評価が低い、高い自己評価・自尊心が不要とする文化心理学（Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999）、（§3）日本人は自尊心が高いが謙遜することが重視され、自分らの実は高い自尊心を表現もせず謙遜で隠蔽する余り、それを意識もしないという日本国内の文化心理学者の見解（Yamaguchi et al., 2007）という3種類に分けることができる。これらを以降、紹介する。

## 1 《一般心理学》の見解

§2や§3で紹介する少数派の「文化心理学」を除けば、社会心理学の基礎的研究は欧米で行われてきた（Henrich, Heine, & Norenzayan, 2010）にも関わらず、欧米人を対象にした研究から得られた心理的プロセスや自尊心を含めた結構（psychological construct）についての諸理論は、普遍的だとされ、世界各国で応用されている。この欧米の心理を普遍化した立場を本論で《一般心理学》と呼ぶ。《一般心理学》者の間では、日本人の自己評価が低い、そして、日本人の自己評価が低いであることは大きな社会問題だとする学説がますます有力になってきているといえる（例えば、岩永、柏木、芝山、藤岡、& 橋本, 2013；古荘, 2009）。

自尊心を測るためには、「私は他の人に劣らず価値ある人間である」などを含むローセンベルグの10項目の自尊心尺度（Rosenberg, 1965；Mimura & Griffiths, 2007）が用いられることが多い。ローセンベルグの尺度が測る自尊心には「自分がとてもよい」と思う肯定的自己表の度合いと、「自

---

1) 次節参照

分でよい」という自己受容の度合いという2つの要因があるといわれる (Mimura & Griffiths, 2007)。ローセンベルグの自尊心尺度を用いた研究が非常に多く、自尊心は《一般心理学》でもっとも研究されている心理結構 (psychological construct) であるとも言われる (Heine, et al., 1999)。自尊心を対象にした研究が多いのは、欧米人を対象にした研究では、自尊心は健康状態・幸福度・社会的成功などの好ましい結果と正の相関をもち、うつ病・自殺・薬物の乱用などの好ましくない指標と負の相関をもっているとされている (Heine, et al., *ibid*) からである。その結果、欧米では早くから自尊心を高める「ポジティブ心理学」(Hewitt, 2001他) が注目を浴びてきた。近年、「ポジティブ心理学」が日本でも注目されている (例えば、セリグマン, 2014)。

《一般心理学》では、自尊心が人間の心理の中核にあると論じられてきた。自尊心や自尊心を高めたい欲求は多くの行動や心理的プロセスを説明するために使われている (Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999)。《一般心理学》において、自尊心がいかに重要であるとされていることを示す事例を紹介する。

まず自尊心は道徳と深く関連しており、人間は自分をよく思い、よく思い続けたい、すなわち自尊心という「道徳的資本」(Bó & Terviö, 2008) を失いたくないからこそ、反社会的な行動をしないと論じられている (古荘, 2009, p205)。そこで日本人の自尊心の低さは、「道徳的資本」が低い証拠だと捉えられ、「少年非行、校内暴力、器物破損、怠学、金属バットによる両親殺害事件、浮浪者襲撃事件、青少年犯罪の凶悪、家庭内暴力、いじめ」(岩永, 柏木, 芝山, 藤岡, & 橋本, 2013, p101, 中略) など多くの反社会的行為の原因になっていると論じられている。

つづいて、マズロー (Maslow, 1968) は、その欲求階段説において、息を吸ったり食べ物を食べたりしたい《身体的欲求》と、次に自分が安全であると感じたい《安全欲求》と、次に人間関係を作る《社会欲求》を満たしてから、《自我欲求》を満たしていない限り、企業を起こしたり、本を書いたり

するなど《自己実現欲求》を満たすことできないと言う理論を唱えた。欲求階段説の《自我欲求》とは、自己評価を高めたいことや、自尊心を持つことを意味する。このように、マズローは、自尊心をまだ高めていない人を、友達を作る段階より先に進むことができない一種の発達障害者と見なしたと言えるであろう。

マズローの見方に乗っかっているかのように、日本の《一般心理学》者には、自己価値感（自尊心）が低い日本人の活動力を悲観する。

しっかりとした自己価値感を持つ子供は、自分と他者を信頼し、外界が自分を受け入れてくれることを疑いません。このために、自分の感情や欲求を素直に表現し、外界に働きかけます。こうした能動的な行動が外界への適応能力を発達させ、自分と外界への信頼感をいっそう高めます。こうして自分を取り巻く世界はますます魅力を増し、生活は喜びや楽しみに満ち溢れたものになっていきます。

これに対して、希薄な自己価値感しか形成できなかった子供は、自分を取り巻く外界を信頼することができず、外界に素直に働きかけることを躊躇してしまいます。これが諸能力の発達の機械をせばめ、自信の獲得を妨げます。そのために、外界は脅威的なものと感じられ、必然的に自分を守ることへと意識が向いてしまうのです（根本, 2007, 「序章・深層の自己価値感—幼児期の環境」 ¶16）。

更に、上述したようにマズローの欲求階段説によれば、《自我欲求》を満たせない人は、社会欲求までしか満たせないということを述べたが、《強化—感情モデル》(Byrne & Clore, 1970) や、《社会的アイデンティティ理論》(Tajfel, 1982) や《ソシオメーター理論》(Leary & Baumeister, 2000) によれば、自尊心の低い人間は、人間関係を作ることもできないとも論じられている。欧米の研究では、自尊心が様々な肯定的な能力や結末と相関をもっているなか、「自覚されたソーシャルサポート」という実在する人間関係の厚みの指標ともっとも強く連動していると論証されている（例えば後に紹介する

Budd, Buschman, & Esch, 2009)。自尊心と人間関係の深い関係についてより詳しく考察する。

《強化—感情モデル》によれば、(Byrne & Clore, 1970; Heine, Foster, & Spina, 2009参照) 友人関係を作ることも自尊心を高める欲求に動機付けられているとされている。Birds of a feather flock together (「同じ羽毛の鳥は一カ所に集まる。」 ≈ 「類は友を呼ぶ」) と言われるように、自分に似ている人と友達になるのは、同じ趣味や価値観があれば、お互いに賛同し合ったりしてお互いの自尊心を高められるからであると実験的に示されている (同上)。しかし、《強化—感情モデル》の大前提は、当事者の自己評価が肯定的だということである。自分自身や自分の趣味嗜好を否定的に評価している者同士であれば、お互いの否定的感情を悪化させ、集まれば集まるほど否定的になるので、人間関係を形成する動機すらないということになる。

それと似ているように、《社会的アイデンティティ理論》(Tajfel, 1982)によれば、集団所属者は自分自身を集団の中心理念群に似せ合わせ、社会的集団的な自己定義を行う。たとえば、「私は紅茶を好み、紳士的なよきイギリス人男性だ」と考えたりすることで、「イギリス人男性」という集団を自分と同一視 (アイデンティファイ) し没我的状態になる。そして、自分が所属していない「外集団」について、例えば、「あの外国人は云々で気持ち悪いよねえ」等と貶す。そうすることで、自尊心を高めると同時に、その結果、集団帰属意識が得られる (Tajfel, 1982; Yuki, 2003参照)。社会的アイデンティティ理論は、武本 (2017) で触れたオリエンタリズム (Said, 1978) の心理的原動力を示唆しているとも言えよう。しかし《社会的アイデンティティ理論》の場合でも、その前提になっているのは、集団所属者は肯定的な自己評価を行っていることである。集団所属者が、自己を否定している者同士であれば、お互いに同一<sup>アイデンティファイ</sup>視し合ってさらに暗くなるであろうから、集団が結束力をもつはずがない。

《ソシオメーター理論》(Leary & Baumeister, 2000) とは、自尊心とは何かや、そもそも自尊心がなぜそこまで大事であるかについての理論である。

《ソシオメーター理論》によれば、自尊心とは社会的な基準からの自分自身の自己評価であり、当事者の社会的価値のパロメーターである。これは、実在する周囲の他者らの自分自身に対する評価とはまた違う。ソシオメーターとしての自尊心は、実在する社会から乖離した社会評価や受け入れという持続的な特性だと論じられている。しかし、自尊心を高めるためには、他人から高く評価されることも有効で、自尊心の高い人は、他人に高く評価され、好かれることを予想しているとされている。その通りで実証的な研究においても、アメリカでは自尊心と、自分がどれだけ支えられていると思うかという「自覚されたソーシャルサポート」とは、非常に高い相関が示されている。例えば、アメリカ人大学生を対象にした研究 (Budd, Buschman, & Esch, 2009) では、自尊心尺度と自覚されたソーシャルサポート尺度の相関係数は $r = 0.82$  (図1参照) で、極めて高い。

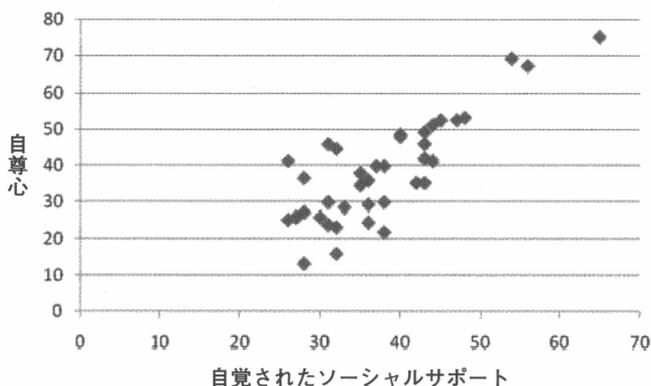


図1：欧米人の自尊心と自覚されたソーシャルサポートの強い正の相関  
(Budd, Buschman, & Esch, 2009, Fig.1にもとづく)

上述したように、社会的な価値のパロメーターと言われる自尊心は、社会的な動物である人間にとって重要で様々な肯定的な成果と関連していると論じられている (Taylor & Brown, 1988) が、その中で、自己評価が肯定的で明るい人は友達が作りやすく人気者であるから明るいし、逆に自己評価が低

くて暗い人は友達が作りにくく、友達がいないから暗いという双方関連性は特に強い。

ここで、《一般心理学》における自尊心の重要性の説明を終わりにし、日本人の自尊心の考察に戻る。上記のように、様々な肯定的な行動と成果と関連をもつとされている自尊心だが、ローゼンベルグ (Rosenberg, 1965) の尺度で測れた日本人の自尊心が欧米人と比べて極めて低いとする研究が多い。例えば、根本 (2007) は、自尊心の国際比較を次のように紹介している。子供の能力の自己評価の国際比較調査では、日本が最低であった。自尊心尺度の1つの項目である「私は他の人に劣らず価値ある人間である」が自分に当てはまる確率は、日本の37.6%に対して、米国ではその倍以上の89.3%である。また、「自分はダメな人間だと思うことがある」という逆転項目が自分に当てはまるとした比率は、米国では48.3%であるのに対して、日本人73.0%だということを注目している。

更にまた、上述したように日本の自尊心が米国と比較して極めて低いということは、いじめ・引きこもり・うつ病・自殺などの日本の様々な社会問題の原因の1つと論じられている。その証拠に、自尊心は憂うつ傾向などの否定的な特質を測る心理尺度と負の相関を持ち (古荘, 2009)、自己受容 (田中& 高木, 2011) や幸福度 (伊藤, 相良, 池田, & 川浦, 2003) などの肯定的な特質を測る尺度と正の相関をもっていることが示されている (Taylor & Brown, 1988)。その結果、日本国内では、自尊心を高めることが望ましいとする研究が盛んに提唱されている (例えば、岩永, 柏木, 芝山, 藤岡, & 橋本, 2013)。学校の教育でもカウンセリングなどの臨床場面でも、どのように日本人の自尊心を高めればよいかについての試みが行われており (古荘, 2009)、文部科学省は、全公立小中学校にカウンセラーを配置することを目標にしている (高浜, 2015)。また、学界だけではなく、冒頭でふれたように『美しい国へ』 (安倍, 2006:2013) という政治的マニフェストも、『一生折れない自信の作り方』 (青木, 2009)・『小さなことで左右されない「本当の自信」を手に入れる9つのステップ』 (水島, 2013) 等と題される自己評価を高

めるための自己啓発書も人気を集めている。

以上のように、《一般心理学》では、欧米発の研究を用いて欧米との比較において日本社会や日本人の心の状態を非常に悲観しているが、この懸念が誤りである可能性を以降、文化心理学の立場から考察する。

## 2 文化心理学の見解

文化心理学の定義を説明する前に、それにおける日本人の自尊心に対する見解を述べておく。文化心理学研究の多くは、日本人の自尊心が低いという事実関係については、《一般心理学》者と同じ考え方であるが、《一般心理学》的な研究と違って、自尊心の低さは「問題ない」だけではなく、自尊心の低さこそが日本人の機動力の元だとも主張している (Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999; Heine, Takata, & Lehman, 2000)。ここでMarkus & Kitayama派の文化心理学と、文化心理学による日本文化心理論を紹介する。

文化心理学は、米国人女性のマークスと日本生まれの男性である北山が書いた有名な自己観の文化比較についての論文 (Markus & Kitayama, 1991) から始まった。その論文の中でマークスと北山は、欧米人が個人主義、日本人が集団主義という従来の比較文化的研究を踏まえながらも、その前提にある欧米中心主義的な前提を覆し、180度の論理的転換を行った。従来の「比較文化心理学」では国によって賞賛される心理特性には違いがあると論じることに留まり、人間の心理が普遍で、心のメカニズムには1つしかないと考えられてきた。更に従来の比較文化心理学は、人間個々人の自己が独立しているという前提にたっていたから、人間の独立を称賛する欧米の個人主義は、実在するとされている独立的自己を抑圧する日本人の集団主義と比べて、より人間の心の実情に合ったものという評価を潜在的に含んで、オリエンタリズム (Said, 1978) の一現象だとも論じることができる。それに対して、マークスは北山と組んで、ミードの内的他者の理論 (Mead, 1967) に基づいて、欧米と東洋の心理の違いが、「自己観」にあると論じた (Markus & Kitayama, 1981)。その理論によれば、欧米人は自己が独立して、先天的

なもの（相互独立的自己観）と見なしているが、東洋人は自己が社会関係・周囲の環境によって作り上げられたもの（相互依存的自己観）と見ていると論じた。従来の「比較文化心理学」と同じ様に、文化心理学も文化の優劣について述べることはないが、文化によって自己観が異なるという前提がある以上、マーカスは社会文化の影響に気付いている東洋人（と女性:Markus & Cross, 1990参照）の相互依存的自己観がより人間の心の実情により合っているという逆の立場に立っている（Markus, 私信, 2012/12/15）。

文化心理学の自己観の研究に基づいて様々な応用研究も行われてきた。その中でハイネ氏の研究では、これらの2つの自己観における動機付けが異なるため、自尊心の有用性が180度異なると主張してきた（Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999; Hamamura, Heine, & Takemoto, 2007）。この研究の流れによれば、自己が独立していると思って（勘違いして）いる欧米人はその幻想を持ち続けるために、自分のよいところを実際より強く意識して、自分自身についての肯定的な感情・自尊心を高揚する。その見返しとして、それによってモチベーションが得られ、社会的行動を起こして、さらにより独立的自己観（幻想）を持つようとする。

以上のように、自尊心とモチベーションを高めようとしている精神的な「好循環」は、アベノミクスなどのケインズ主義経済政策の心理版のようなものとも言えよう。あるいは、日本語で俗に言う「調子者の心理」と比喻することができる。そのような心理をもつ者は、公共事業で自国の経済に印刷されたお金をばら撒くかのように、「私はできる!」、「自分はいい人だ!」等と自分をおだてて、「調子にのって」、動機を高めて、活動することで、さらに自分を肯定的に見て、褒めることができ、更に調子にのって更に活動すると考えられる。

これに対して、ハイネ他（Heine, et. al 1999）によれば、日本人は自分自身を高く評価したいという欲求はない。その代わりに、日本人は逆に「反省」し、自分の悪いところを意識することによって、それらの弱点を「ダメ出し」・「潰し」、自己を「改善」することで、相互依存的に支えあっている周

囲から、他人のみに自分を高く評価してもらおう。言い換えれば、日本人は「調子」で頑張っているのではなく、人間関係のよさと感謝が日本人の努力の見返りとなっていると論じられている。このように、「お調子者」の欧米人と「反省」・「改善<sup>2)</sup>」し感謝される日本人は大変異なった心理をもっていると論じられている (Heine, 2003)。

前節で述べたように自尊心を維持し、高める欲求が、道徳行動、創造性、友人の選択、集団所属を説明するために用いられている。一方、マークスと北山流の文化心理学において、自尊心は、日本人の行動や心理のプロセスを説明する力がないく、代わりに一連の異なった心理的メカニズムが提案されている (Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999他)。以降、文化心理学の立場にたつて、前節で触れた心理のプロセスを順番に再考察し、それぞれが日本文化心理の理論においてどのように説明されているかを見ていく。

まず、(非)道徳的行動に関して、日本の「恥じの文化」において、日本人が反社会的・非道徳的行動をしないのは、心理的な「道徳的資本」を失い、

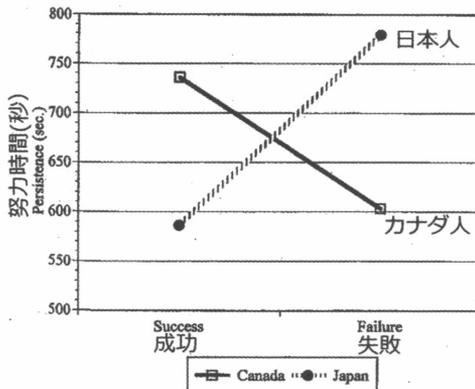


図2：成功・失敗後どれだけ頑張り続けるか (国別)  
(Heine, Takata, & Lehman, 2000, p.603 Fig.1に基づく)

2) これらの呼び名は使われていない。この段落で「括弧」に囲まれている日本語の語句は外来語として導入されている“kaizen”以外に、英語では言い表すことが難しい。

罪を感じるからだけでなく、実在する人間関係を失い、社会的制裁や外圧を受け、恥を感じるからだと言われている (Benedict, 1946/2006; Kitayama, Markus, & Matsumoto, 1995)。

前節で述べたように、《一般心理学》者の間では、自己評価を高められたいという意味の「自我欲求が満たされること」が自己実現の条件とされ (Maslow, 1968)、自己評価が低い日本人の自己実現能力が悲観されている。しかし、文化心理学の立場からでは、日本人の創造への動機付けは違うと論じられている。欧米人は創造することによって自己評価・自尊心を高めようとしているので、創造性が好評で成功したと感じる場合に努力する。しかし、日本人の創造性は、道徳的行動同様、内的要因によるものではなく、感謝を得たり、批判を避けたりする社会的環境や社会的順応のために創造活動を行うので、創造性が不評の場合においてこそ、改善する努力をするという実証的研究を発表している (Heine, Takata, & Lehman, 2000 : 図2参照)。調子によって頑張るところか、日本人が不評を受けて頑張るとする理論である。

つぎに友人選択行動において、「類が友を呼ぶ」という諺は日本語にもあるにもかかわらず、米国人は友人の趣味や価値観を他者のそれより自分に似ていると評価するが、日本人には同様の傾向がなく、自分とは似ていない人とも友達になり、自分に似ているという人とも敵になり、類似性と親密さとの間に相関がほとんどないという研究結果がある (Heine, Foster, & Spina, 2009)。

このような友人の選択の違いの理由は、集団所属の文化心理学研究 (Yuki, 2003:図3参照) によって説明されている。Yukiの研究において、前節 (2.1) で述べたように、欧米人は「イギリス人男性」などの均質性の高い集団と一体感をもち、外集団を軽蔑し、内集団及び自己を高揚する (図3の (a)) が、日本人は集団を多様性のある相互扶助しあうネットワークと意識し、外集団を軽視する必要も興味もない (図3の (b)) と実証的に論じられている。

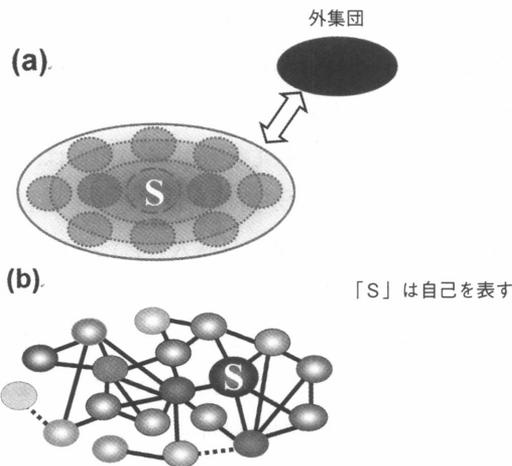


図3：(a) 外集団と比較する没我的欧米集団と (b) 相互扶助しあうネットワークとしての東アジアの集団

Yuki, 2003 p.172

このように文化心理学では、日本人の行動を説明するためには、自尊心を使う必要はない。しかし、文化心理学者の多くは、日本の《一般心理学》のように日本人の自己評価が低いとする。例えば、日本人の自尊心が北米人の自尊心よりやく1.6倍低いことを示している (Heine, Lehman, Markus, Kitayama, 1999) が、異なった文化心理をもっている日本人にとって問題とされるはずはないと論じられる。

また、ハイネ氏が指摘するように、自己評価の様々な尺度において欧米人が自分自身を実際より高く評価している。武本 (2017) で述べたように、欧米社会では、自分自身を公平に評価している者は鬱病患者のみだという研究もある (Taylor & Brown, 1988)。米国大学の教員は、教育能力において自分が所属機関の「平均以上」だと自称するのは、94%である (Cross, 1977)。文化心理学では、欧米の「調子者文化」は、「奇妙」 (Henrich, Heine, & Norenzayan, 2010) で、人間を代表していないと論じられる。何よりも、ハイネの研究は、自尊心を含めた欧米人の肯定的な自己評価は非常に非現実的

で、調子者の欺瞞であり、自分らを元気づけるための内的自慢話ということ  
を明確にしている (Falk, Heine, Takemura, Zhang, & Hsu, 2015)。

### 3 日本の文化心理学者

最後に、日本人も自分自身を肯定的に思いたいという欲求と隠された  
自尊心があり、「日本人の自尊心が実は高い」と主張する研究を紹介する  
(Yamaguchi et al., 2007; Yamagishi, Hashimoto, & Schug, 2008他)。この  
ような理論において、日本人は、匿名のアンケートである自尊心尺度に対し  
て答える際 (Kitayama, 1998) にも、自分を高く評すると社会的な制裁を受け  
る恐れから、自分の高い自尊心を隠し謙遜した否定的な自己評価を見せか  
けているだけだと論じられている。

この系統の研究においては、日本人の自尊心を掘り起こすためにはいく  
つかの方法がある。たとえば、潜在的態度テスト (Implicit Attitudes Test  
(IAT) : Greenwald & Farnham, 2000参照) を用いることがある。潜在的態度  
テストというのは、具体的に、パソコンの画面の中央に①良いと②悪い刺激  
(単語やイメージ) を表示し、それらの刺激を、画面の上左右に表示される  
「自分」や「他人」を表す刺激と組み合わせる速度を測る。その結果として、  
欧米人も日本人も同程度、《自分とよい刺激》・《他人と悪い刺激》という組  
み合わせを、《自分と悪い刺激》・《他人と良い刺激》という組み合わせより、  
数ミリ秒の差だが、早く行う。このことから、「日本人も欧米人に負  
けないほどの自尊心がある」という結論を見出している (Yamaguchi et al.,  
2007)。

### 4 これまで紹介した学説の問題点

本論のテーゼを紹介する前に、これまでに紹介してきた学説の問題点を考  
察する。ひとまずそれぞれの問題点の指摘はそれぞれの論者にゆだねる。

§1の《一般心理学》において、古荘 (2009) は §3のIATで示された  
日米共通の指標を自尊心への欲求と解釈し、§2の文化心理学者の「日本

人は自分自身を高く評価したい欲求はない」(Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999) という理論を否定する材料としてとりあげている。また、古荘(同上)は、§3の国内の文化心理学者に対して、自分への肯定的な感情は存在するが、社会的抑圧の厳しさのあまり匿名の尺度でも「他人に悟られる場面では、自尊感情を高め」(古荘, 2009, p42) 自尊心を顕在的に表せないことは問題と見る。そして、日本社会のこのような抑圧が色んな社会的な問題を引き起こしていると論じる。

ヘイネ等の文化心理学(§2)において、《一般心理学》(§1)と同様に、日本人の自尊心が非常に低いと見解が一致しているが、《一般心理学》は、日本人特有の心理的プロセスの数々と日本人にとっての自尊心の不必要性を見逃していると論じる。一方、日本の文化心理学(§3)に対して、日本人が謙遜して、実は高い自尊心を隠していることについて懐疑的である。それには、調査アンケートにおいて、匿名性を捜査(Kitayama, 1998; Heine, Takata, & Lehman, 2000参照)しても、日本人の自己評価が変わらないということは、謙遜説で説明しづらいと指摘している。また、日本人の「実は高い」自尊心を示すべく潜在的態度(IAT)テストは、他の心理尺度や、実生活での行動との間には相関が見出されていない。IATが本当に自尊心を測っているのであれば、IATで高い「潜在的な自尊心」は、幸福度・健康・動機付けやソーシャル・サポートなどとも連動するはずだが、統計的な相関が非常に弱い。そこで、IATで測定されているのは、自分自身に対する肯定的な感情だけであって、自尊心のような(偽りでも)自己評価ではないと論じられている(Falk, Heine, Takemura, Zhang, & Hsu, 2015)。

Yamaguchiらなど日本の文化心理学者の立場(§3)からすれば、日本人の自尊心が低いとする《一般心理学》者やHeineら主流の文化心理学者による日本文論はそもそも暗すぎる。日本人にも自尊心や自己高揚があると論じる。YamaguchiらはIATなど特定の場面において、謙遜で隠されている日本人の自尊心や自己高揚が現れると論じる(Yamaguchi et al., 2007)。

以上それぞれの反論には一理があることが理解できよう。本論の立場と一

番近いである日本の文化心理学者の山口らが主張するように、《一般心理学》や《文化心理学》の研究で示されているプライドがもてない日本文化像はあまりにも暗いと思われる。しかしまた、一方、一般的な心理学者が反論するように、日本人の自己肯定が潜在的・間接的であればそれにも問題があるという主張も理解できよう。そして、他の行動・現象と連動しないIATテストだけであれば、江戸時代来日してきた外国人にも強く感じられた（武本, 2017）「日本人のプライド」が説明されているとは言い難い。

## 5 《日本版自尊心たるもの》の必要性

今度は本論の仮説が各々の学説を補い、各学説間の矛盾を解消できるかについて検討する。上述の3種類の学説にもっとも不足しているのは、道徳的に行動すれば失われる「道徳的資本」と、自らの社会的価値を測る「ソシオメーター」に立ち代るものであり、以降この2つ領域において、《日本版自尊心たるもの》を見つけ出すものが必要であると論じる

まず道徳的行動の動機付けを上で紹介した3つの見解から検討する。《一般心理学》（§1）では日本人の自尊心は低く、低いがために様々な社会問題が引き起こされているとみる。しかし、日本人の道徳的資本が本当に言語的尺度で測定されている自尊心であって、またそれが一般的心理学で論じられるような中心的な役割をもっているのであれば、アメリカ人の自尊心の6割しかない日本人の社会が道徳的に大変乱れているはずだと思われる。しかし、日本の治安がよく、日本人は道徳性が高いということは統計（Leonardsen, 2004）や武本（2017）で紹介した来日した外国人（Coleridge, 1872; Golovnin, Rikord, & Shishkov, 1824; Golovnin & Shishkov, 1819）の評判から昔から知られている。暴力・覚せい剤・家族制度の崩壊・性病・強姦などは自尊心が低い日本よりむしろ自尊心が高い欧米諸国で問題になっている。

この実態を文化心理学も説明できないと思われる。文化心理学によれば、内的な自己評価の代わりに、日本人は他者評価の低下や人間関係の断ち切り

を恐れて、その外的・実存するものを道徳的資本としていると論じられている。しかし、そうであれば日本人は人目を盗んで誰にも見られていないときに悪行を行おうとするはずだが、夜になって、あるいはホテルの個室の中に（舟橋, 2008, p166）、日本人の道徳は逆に特筆するほど高貴である。

最後に、他人への印象を操作するために謙虚な言動をしながら無意識的には自分を高揚しているとする山口らの説も、道徳性の資本として、説得力に欠いている。欧米人はとっさに自己卑下したり、自分を批判したり、謙虚になったりすることが精神的に苦しいからこそ、言語的自己評価が道徳的な制裁や抑止力をもっている。やはり日本人の心理にも、下げては辛い自己評価がなければ、そのような抑止力をもつ《日本的自尊心たるもの》・道徳的資本にはならない。

上述のように、日本の道徳的資本は、実在する他人の評価の低下や、それを感じさせる恥という感情だと論じられてきた（Benedict, 1946/2006）。しかし、恥を外圧的によって引き起こされている感情ではなく、自分自身の行動を語りそれを聞くときに引き起こされる罪に対して、恥は自分の行動を想像してそれを視るときに引き起こされる否定的感情だとする理論も提唱されている（鈴木, 1976; Morris, 1976; Williams & Long, 2008）。視覚的自己評価の外的な側面は否定できないが、自分自身の「外見」と他人の視線は心の中でシミュレーションできる。Benedict（同上）などは欧米の（言語的）自己評価は外性（externality）を必要としないと論じるが、ミード（Mead, 1934/1967）によれば、他者の視点を取り入れることによって内的な他者を形成することで心の中で言語的自己評価を行うことができるが、本来は外的である言葉と対話者を必要とする。以降では、従来の内⇄外の構造を脱出して、言語⇄想像の構造（表1）に沿って、恥の反面しとしての肯定的自己評価・感情である《日本版自尊心たるもの》を、人間関係づくりにおいてを検討する。

表1 自己評価の構造

	言語中心 (欧米)	想像中心 (日本)
否定的感情・評価	罪	恥
肯定的感情・評価	自尊心	《日本の自尊心たるもの》

さて、上(§1)では、人間関係作りなどの社交的な場面において、自尊心が、当事者の社会的価値のパロメーターであるという理論を紹介した。そこで、「自己評価が肯定的で明るい人は友達が作りやすく人気者であるから明るいし、逆に自己評価が低くて暗い人は友達が作りにくく、友達がいなくて暗いという関連性は特に強い」と述べたが、日本の社会においても、自分が周囲から肯定的に視られているかがわかる，《日本版自尊心たるもの》の高い「堂々としている」「明るい」人もいると思われる。しかし、武本(2017)で見てきたように、同じ明るくて堂々としている明るい人は自分を言語的に否定することが多い。そのような自己卑下のお世辞を振り返る。

日本人の人間関係の潤滑油としてお世辞がある。その中には、武本(2017)で詳しく紹介したように、欧米人が昔から現在まで不思議に思ってきた、例えば、「お宅のご立派なつくりと比べて我が家がうさぎ小屋みたい。」「いいえ、いいえ。とんでもありません。ご新築されて、我があばら家と比べて、宮殿のごとくですよ」「いいえ、いいえ。。。」と続くような日本人の自己卑下のお世辞行為がある。この行為も上で紹介した3種類の学説から検討する。

《一般心理学》(§1)の立場からすれば、このような発言の否定的なところは正すべきで、「お宅は立派ですね」と言われると、欧米人のように「ありがとうございます。私もそう思っています。お宅の家も宮殿みたいです。」と素直に(?)褒め合えばよいと推薦されるであろう。文化心理学の立場(§2)から考えると、日本は他人からの肯定的評価を真に受けるだけでなく、自分自身を否定的に評価することは痛くもなく問題にならない。「我が家がうさぎ小屋」だと心から信じながら自宅を改善しようしているのである。そして山口ら日本の文化心理学(§3)の立場からすれば、これらの2つの見解は暗すぎて、自己卑下のお世辞は直接・顕在的に他者高揚・自己否定的であ

るが、間接的・潜在的に自己高揚（自惚れ）の攻略であると論じられている。

本論では、日本人の文化心理学者の見解もまだ暗く、日本社会を否定的に解釈していると論じる。「自己卑下のお世辞」という行為は、いたって普通で日本社会での社交的な場を持ち上げ、当事者全員をより愉快的気持ちにさせる日本人の大人がもつ明るいソーシャルスキルである。そして、欧米社会での自尊心の高さは自他にとって明白であるように、「自己卑下」なお世辞ができる日本人も、自分自身の立場からも、周囲から見ても、明るくて自信があるように見える。「いいえ、いいえ。とんでもありませんよ」といえる日本人の明るさが「潜在的」ではなく、自他にとって一目瞭然である。なぜならば、「自己卑下のお世辞」において「宮殿」だのお世辞の肯定的な意味内容も、「あばら家」・「うさぎ小屋」など否定的な言語的意味内容もちっとも重要ではない。重要なのはその行為自体である。そこで、言語中心的に考え方を排除して、この行為を視ると、日本人の肯定的な自己評価が自己視的であれば、日本人はお世辞という実は非言語的な行為を楽しみながら、更に我が家を影像的や、和み、落ち着くような気持ちや《日本的自尊心たるもの》を顕在的に引き立てあっていると思われる。日本の自己卑下のお世辞は、Hall (1976, p. 98) の構想に従って、文脈的だとも呼ばれる (Tsuda, 1992)。しかし、表 1 の構想に沿って、言語中心的な考え方を排除して、江戸時代に来日した外国人でも分かるほど、その場にいる当事者の立場から視覚的に観察れば、当事者の肯定的自己評価は自明・顕著で堂々していて明るいと思われる。少なくとも Lebra (1976) が論じるように、言語的コミュニケーションを中心として、その他を「文脈」とする考え方を日本文化においても適用するのは疑わなければならないであろう。

## 実験

日本人は尺度に対して自分が「価値のある人間だ」などを肯定しないのは、自己評価が低いからでもなく、自分らが抑圧されているからでもないが、欧米人と違って言語的な自己評価をそれほど重要なものとみていないか

らだと考えることができる。本論の著者は、武本（2017）で挙げたような経験を踏まえ、「お天道様」（Funahashi, 2008, p181）などにまつわる日本人の宗教的現象からの感銘に基づいて、日本人の自尊心が現れるのは映像的な自己表現において表われるという仮説を実証的に示してきた。例えば、カメラをもたせて自分を表す写真を撮らせると、日本人の自己撮影写真が欧米人のそれより肯定的だという結果が得られた（Leuers = Takemoto & Sonoda, 1998）。また自分の将来を雑誌からとった映像をつかってコラージュで表すと「控えめ」な日本人のコラージュがアメリカ人のコラージュより肯定的だとの結果も示された（Leuers = Takemoto & Sonoda, 2000）。しかし、自己撮影やコラージュという手法はローセンベルグの自尊心尺度より実施しにくい。自己撮影写真を撮り、コラージュを作ることには相当の時間がかかり一斉に多くの被験者の自尊心を測ることが難しい。また、IATのように写真の撮り方やコラージュは他の心理テストとの相関が示されていない。

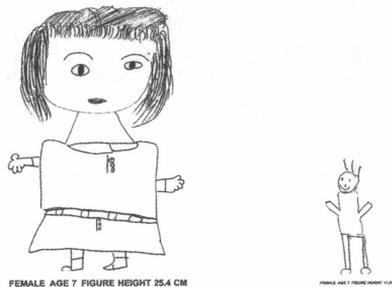


図4 日本人と米人の自己肖像画の高さの比較  
(La Voy, 2001, p7)

本論では被験者が自分自身を描く自己肖像画を、日本人の自尊心を測定する指標として使う。その理由には日本人が自分自身について心のなかで思い描いている自己像を検証するには、自分自身の自己肖像を描いてもらうことが何より直接的であると考えられるからである。また、それには、アメリカ人と日本人の子供が自分自身を描く自己肖像画を比較した研究がある。

La Voy et al. (2001) は、一定サイズの紙1枚に自分自身を描きなさいということを求めた。日本人の子供が描く自画像は、米人の子供のそれより1.6倍大きいということが注目できる (図4参照)。人間は自分にとって価値のあるものを大きく描くという研究 (Bruner & Goodman, 1947) と合わせて考えれば日本人の自己肖像画にも日本人の高い自尊心が表現されていると考えられる。そして、また、自己肖像画を取り扱う1つの理由には、日本の漫画家は、自分自身を描くマンガにおいては自分を若く可愛らしく描く傾向にあるように思われ、それこそ欧米人の自慢話≒自尊心に対応して、日本人の自我像を「ジマンガ」(自慢画・自漫画)と呼んだネーミングの由来であった。

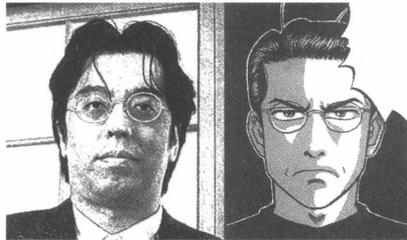


図5：小林よしのりの実像 (小林, 2000, p.35) とジマンガ (小林, 2008, p.21)

そこで実験1では次の仮説を立てた。1) 日本人の自己肖像画 (ジマンガ) のサイズは、日本人の自尊心を表現しているため、ローセンベルグの自尊心尺度とジマンガの高さとの間には正の相関が示される。2) IATと異なり、他の現象と連動しないあやふやな肯定的感情ではなく、一種の自己評価であるため、日本人はローセンベルグの尺度に対してより、影像的自己表現に自我関与するので、自尊心尺度よりジマンガの高さの方が自覚されたソーシャルサポートと相関を持つ。

### 実験1

日本人の大学生31人 (男性10人・女性22人) に (1) ローセンベルグの自尊心尺度 (Mimura & Griffiths, 2007) (2) 自覚されたソーシャルサポート

尺度（嶋田洋徳, 岡安孝弘, & 坂野雄二, 1993にもとづく）の記入と（3）自己肖像画を描くように求めた。（1）と（2）は集計して、（3）は高さを測って数量化した。

## 実験1の結果

表2 ジマンガの高さ・自尊心・ソーシャルサポートの相関係数

ジマンガの高さ対自尊心	0.276*
ソーシャルサポート対自尊心	0.114
ソーシャルサポート対ジマンガの高さ	0.079

自分自身を大きく書いた被験者は自尊心の高い被験者であって、自尊心尺度とジマンガの高さには有意 ( $p < .07$ ) だが、やや弱い正の相関が見られるので仮説1が指示された。しかし、ソーシャルサポートは、ジマンガの高さともローセンベルグの自尊心尺度とも相関が見られなかったので、仮説2が指示されなかった。

## 実験1の考察

欧米での研究 (Budd, Buschman, & Esch, 2009) と異なり、日本人の自尊心が自覚されたソーシャルサポートとの相関を持たないことは文化心理の差を示している。しかし、実験1ではジマンガのサイズにおいても、ソーシャルサポートを予想できる代わりの指数が見出されていない。その理由を検討しなければならない。そこで、まず実験1で被験者に描かれたジマンガからすれば、男性のジマンガは高さの変化がより大きく絵の肯定的さと相関をもっているように思われるが、女性の絵は高さの変化はそう小さくなく自分自身を小さく可愛く肯定的に描いている女性もいるように見受けられる（図6参照）。先行研究 (La Voy et al., 2001) は子供を対象にした研究であって、大人の女性は少なくとも大きいイコールよいという固定式が当たらず、場合には小さいというのは可愛くてよいと考えているようである。そこで、実験1を男女別で同じ相関係数を求めると、男性の場合ではジマンガの高さは自

覚されたソーシャルサポートと有意 ( $p < .01$ ) の正の相関を持つが、女性のジマンガの高さとソーシャルサポートは相関をもっていないことが分かる (表3参照)。

表3 ソーシャルサポート対ジマンガの高さ (男女別)

ソーシャルサポート対ジマンガの高さ (男性)	0.42**
ソーシャルサポート対ジマンガの高さ (女性)	-0.054

そこで、日本人女性のソーシャルサポートを予想する自己肯定感は、ジマンガの高さでは測れないことが分かった。しかし、女性のジマンガにも明るくて肯定的な肖像画とそう肯定的ではない肖像画があるように見受けられるので、第三者によって主観的に各肖像画の肯定的さを数量化することで、自覚されたソーシャルサポートとの相関が見られるかどうかを実験2で調べる。

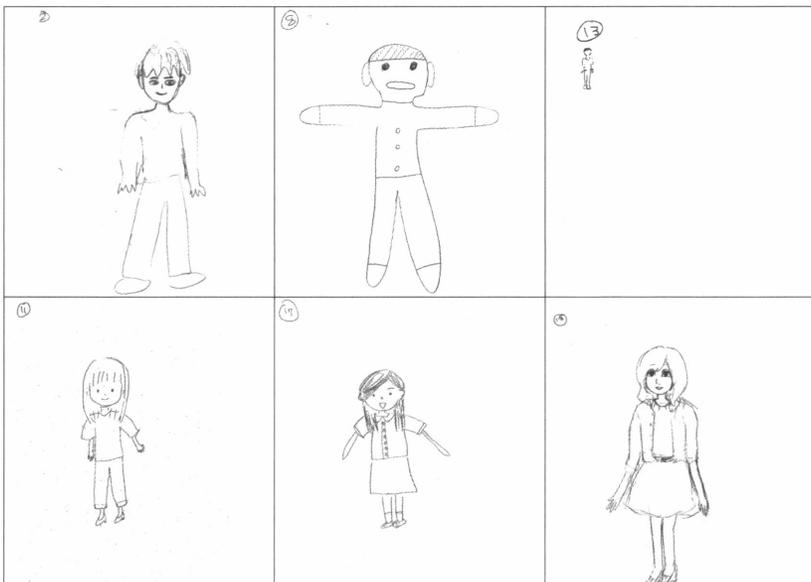


図6：ジマンガ

## 実験2

実験1で描いてもらったジマンガを男女学生2人に、ローセンベルグの自尊心尺度が測っていると定義されている2つの要因である「自分はとてもよい」・「自分はこれでよい」(Mimura & Griffiths, 2007)を表しているかという教示を使って各被験者のジマンガ(肖像画)を5点法で評価してもらった。

## 実験2の結果

第三者評価者の男女が行った評価を平均し、ジマンガの高さと自尊心とソーシャルサポートとの相関を表4で示している。

表4 評価・自尊心・ジマンガの高さとソーシャルサポートの相関

高さ 対 第三者評価	0.003
自尊心 対 第三者評価	-0.053
自覚されたソーシャルサポート 対 第三者評価	0.318*
自覚されたソーシャルサポート 対 著者評価	0.469**

ジマンガの第三者評価は、ジマンガの高さとも自尊心とも相関がみられなかった。しかし、ジマンガの第三者評価が自覚されたソーシャルサポートとの有意 ( $p < .05$ ) で正の相関をもっているため、仮説2が支持されている。すなわちジマンガを主観的に評価してもらうことによって、通常の自尊心尺度では得られない自覚されたソーシャルサポートを予想する指数が得られた。

自覚されたソーシャルサポートのデータを入力しているうちに各被験者の数値を知って、それによって影響された可能背が否定できないので信憑性は欠くとも考えられるが、著者(武本)によるジマンガ評価とソーシャルサポートと間に、高い ( $r = 0.469$ ) 有意 ( $p < .01$ ) の正の相関が検出された。

## 実験2の考察

ジマンガの第三者評価は、ジマンガの高さ及び自尊心尺度とは相関を持た

なかった。しかし実験1で見たように、両者は自覚されたソーシャルサポートとの相関をもっておらず、日本人の自己評価の実情を表していると思われない。一方、評価法方法を訓練されていなくても第三者の大学生によるジマンガの評価が、自覚されたソーシャルサポートとの正の相関が得られたため、言語的自尊心よりジマンガが被験者の自己評価を測定できていると言えるであろう。第三者による評価を精察すると、評価者の大学生がジマンガの描き方の上手さに左右され過ぎたように思われる。著者の評価においては、被験者が自分を肯定的に描こうとした意欲を読み取り、自覚されたソーシャルサポートとの強い正の相関が得られた。さらに経験を重なれば臨床場面などでの診断としても使えるほど、ジマンガが被験者の自己評価を正確に表していると思われる。

## 結論

本論では日本人の自己評価や自尊心についての矛盾し合う見解を紹介した。日本人の自尊心があまりにも低い、日本人の自尊心は低いながらもよい、そして日本人はただ表面的な謙遜をしているが、実はプライドは欧米人に負けないほど高いという学説を考察した。そこで、それぞれの見解には一理があることを認めながら、それでも日本人の自尊心のパラドックスが解き明かされていないと論じた。それを解決するために、言語対想像という2種類の媒体・経路を通じた自己評方法論を展開した。すなわち、欧米人は物語の自己があるために言語自己表現に対して自己愛を感じて、日常会話の中だけではなく、自尊心尺度などの心理テストの答えにおいても自慢話のような言語的な自己肯定を表現する。それに対して、日本人は映像的な自己意識があるために、心像的自己表現に対して自己愛を感じ、肖像画を描くように求められる際において、ジマンガ（自漫画・自慢画）という映像的な自己肯定を表現すると論じた。

日本人の自尊心たるものについての仮説を検証するために、自尊心尺度という言語的自己表現と、映像的な自己表現のサイズと、自覚されたソーシャ

ルサポートとの相関を調べた。その結果、男性被験者においては、映像的自己表現のサイズと自覚されたソーシャルサポートとの間に相関が見られたが、女性被験者には相関が見られなかった。そこで、実験2において、本研究の仮説を明かされていない第三者に日本人のジマンガを評価してもらって、ジマンガの評価と自覚されたソーシャルサポートとの相関を調べた。その結果、言語的自己評価（自尊心）は自覚されたソーシャルサポートともジマンガの評価とも相関がなく、実質的な自己評価を表していると思われたいのに対して、ジマンガの評価は自覚されたソーシャルサポートとの正の相関をもっていることが分かった。すなわち、日本人の自信、自分がどれほど愛されているかの「ソシオメーター」(Leary & Baumeister, 2000) は、自尊心尺度よりは、ジマンガの評価で正確的に測定できたと論じた。

以降、この結果の意義について考察する。まず、論理的な展開としては、日本人は専ら相互依存的 (Makus & Kitayama, 1991) だけではなく、日本人にも肯定的な幻想 (Taylor & Brown, 1988) があり、内的な他者 (Mead, 1934/1967) による評価から得られる精神内の自己動機づけも行い、内的な道徳的規準 (Benedict, 1946) をもっているということを論じることができる。このような心理を分かりやすく普通の言葉で説明すると、お天道さまを纏わる信仰についてによって次のように表現されている。

昔の人は、道徳という概念がない時代から、何か悪いことをしようとしたときや、後ろめたいことをするときなどは、「お天道さまがみてござる..」と自分を律したり、他人をたしなめたものです。たとえ人が見ていなくても、お天道さまが心の中にさえいれば、悪いことをするときにはブレーキがかかりますし、善いことをするときにはアクセルを踏むことができます (Funahashi, 2008, p.181)。

日本人の自尊心や幸福度などの言語的自己評価の低さが政治的に着目されているが、これらの言語的な尺度が示す否定的な結果が日本人の心の状態を正確に把握していると思われたい。そこで、例えば、日本人の「低い幸福度」を上げるために、日本政府が財政赤字を拡大したり、金融緩和を行った

りして、芸術センター・コミュニティーセンター・スポーツセンターなどの福祉施設を建設したり、五輪を誘致したり、個人の消費を増やしたりする対策が施行されている。しかし、日本人がそれまでも実は自尊心も幸福度があって、逆に借金の膨大さや消費の過熱が心配を生じさせることで、それまでには高かった日本人の自信や幸福度を上げるつもりの方針が日本人の自信や幸福度を下げているという危険性が示されている。さらに、上で紹介してハイネ (Heine, Takata, & Lehman, 2000, 図2) が論じるように、日本人本来の反省・改善を基本とする精神が、言語不評を受けるときに働き、言語的な好評を受けるときに発動しないのであれば、たとえ日本人も言語的に自己肯定するようになったら、頑張らなくなるという逆効果をもたらす恐れもある。

一方、このように映像を通して日本人の本当の自己評価を測定できるのであれば、個人の社会適応や教育課程の効力や精神療法の効き目を測るために、これまでに欧米で自尊心尺が使われている数々の場面でジマンガ、あるいはその種類の視覚的な測定方法を活躍させることが可能だと考えられる。また、日本人女性の自己評価を測定するためにジマンガを主観的に評価する必要があるが、日本人男性の場合、ジマンガの高さを測るだけで、客観的且つ簡単な手法で自己評価を測定できることが示唆されている。

上で論じたように、欧米人は自分自身を物語り、言語的自己表象を精神の「重心」(Dennet, 1992) と考え、それを高揚し自惚れて評価するのに対して、日本人が自分を想像・内省し、面・面子・体裁・世間体・顔などという映像的な自己表象を精神の中心 (和辻, 1937, p. 4; Lebra, 1992, p. 106) とし、自分自身を思い描くと考えられる。両者は似ているような自己評価装置であり、良し悪し・優劣をつけるようなものではないかもしれない。しかし、上述したように、視覚的な表現と異なり、言語的表現は絶えず他の比較において行われる (丸山, 柄谷, 立川, 岸田, & 竹内, 1993, 図p. 19) ので、言語的自己高揚は、外集団非難を伴うことが多い (Said, 1978; Yuki, 2003)。そこで、言語的自己評価という精神面でも、ケインズ主義と金融緩和という政治経済面

でも類型の手法を導入しようとしている現政権が、同時に軍事力も強化しようとしていることを懸念する余地はあると思われる。

更に、限られた精神的資源（エネルギー・時間）をもて、2つの精神的な自己評価・自己集約メカニズムを実行するのにあたって対立が生じる場合もある。例えば、現在日本人の教育のなかで、カタカナ語の名前をもっている、「ポートフォリオ」「グラジュエーション・ポリシー」や「ケーパビリティ・ベースド・カリキュラム」や「PDMC（プラン・ドゥ・マネージ・チェック）サイクル」などの言語的な自己評価システムを導入し強化することで、日本の大学に欧米的な言語的自己評価を導入して強めることができるが、言語的な自己評価に対する思い入れ・自我紹介が少ない場合では動機付けになりにくいだけでなく、従来の発表会や数々の対面式の人間関係の育成や個人的な内省などのより視覚的な自己表現・評価するエネルギーや時間が削減される可能性があるあるので、注意が必要と思われる。

本研究では、限られた人数を対象にして1つだけの視覚的な自己評価指標に基づいて非常に広い範囲に及ぶ解釈を行った。今後は、自己撮影写真やコラージュやジマンガの肯定的な度合いの相関や、より視覚的に測定されている社会的適応指標との関係で、ここで提案されている日本人の映像の自尊心を検証していく必要がある。

## 謝辞

著者の指導教官各位、丹野義彦、Giles Frazer及び著者の家族に感謝を表す。

## 参考文献一覧表

- Benedict, R. (2006). *The Chrysanthemum and the Sword*. Houghton Mifflin Harcourt. (Original work published 1946)
- Bó, E. D., & Terviö, M. (2008). *Self-Esteem, Moral Capital, and Wrongdoing* (Working Paper No. 14508). National Bureau of Economic Research. Retrieved from <http://>

[www.nber.org/papers/w14508](http://www.nber.org/papers/w14508)

- Bruner, J. S., & Goodman, C. C. (1947). Value and need as organizing factors in perception. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 42(1), 33.
- Budd, A., Buschman, C., & Esch, L. (2009). The correlation of self-esteem and perceived social support. *Undergraduate Research Journal for the Human Sciences*, 8(1). Retrieved from <http://kon.org/urc/v8/budd.html>
- Byrne, D., & Clore, G. L. (1970). A reinforcement model of evaluative responses. *Personality: An International Journal*, 1(2), 103-128.
- Coleridge, H. J. (1872). *The life and letters of St. Francis Xavier : in two volumes*. Asian Educational Services.
- Cross, K. P. (1977). Not Can, but Will College Teaching Be Improved? *New Directions for Higher Education*, 1977(17), 1-15. <https://doi.org/10.1002/he.36919771703>
- Dennett, D. C. (1992). The Self as a Center of Narrative Gravity. *Self and Consciousness: Multiple Perspectives*. Retrieved from <http://ase.tufts.edu/cogstud/papers/selfctr.htm>
- Falk, C. F., Heine, S. J., Takemura, K., Zhang, C. X., & Hsu, C.-W. (2015). Are Implicit Self-Esteem Measures Valid for Assessing Individual and Cultural Differences? *Journal of Personality*, 83(1), 56-68.
- Funahashi, 舟橋, 淑行. (2008). お天道さまが見てござる—よみがえる日本の心 (The Kind Old Sun is Watching: A Resurrection of the Japanese Heart). 東京: 明窓出版.
- Golovnin, V. M., Rikord, P. Ī., & Shishkov, A. S. (1824). *Memoirs of a Captivity in Japan, During the Years 1811, 1812, and 1813: With Observations on the Country and the People*. H. Colburn and Company.
- Golovnin, V. M., & Shishkov, A. S. (1819). *Recollections of Japan: Comprising a Particular Account of the Religion : Language : Government : Laws and Manners of the People : with Observations on the Geography : Climate : Population and Productions of the Country : to which are Pre-fixed Chronological Details of the Rise : Decline : and Renewal of British Commercial Intercourse with that Country*.
- Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the Implicit Association Test to

- Measure Self-Esteem and Self-Concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79(6), 1022.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. Anchor Press.
- Hamamura, T., Heine, S. J., & Takemoto, T. R. (2007). Why the Better-Than-Average Effect Is a Worse-Than-Average Measure of Self-Enhancement: An Investigation of Conflicting Findings from Studies of East Asian Self-Evaluations. *Motivation and Emotion*, 31(4), 247-259.
- Heine, S. J. (2003). An Exploration of Cultural Variation in Self-Enhancing and Self-Improving Motivations. In *Nebraska symposium on motivation* (Vol. 49, pp. 101-128).
- Heine, S. J., Foster, J.-A. B., & Spina, R. (2009). Do birds of a feather universally flock together? Cultural variation in the similarity-attraction effect. *Asian Journal of Social Psychology*, 12(4), 247-258.
- Heine, S. J., Takata, T., & Lehman, D. R. (2000). Beyond Self-Presentation: Evidence for Self-Criticism Among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26(1), 71-78.
- Heine, S., Lehman, D., Markus, H., & Kitayama, S. (1999). Is There a Universal Need for Positive Self-Regard?. *Psychological Review*. Retrieved from [http://humancond.org/\\_media/papers/heine99\\_universal\\_positive\\_regard.pdf](http://humancond.org/_media/papers/heine99_universal_positive_regard.pdf)
- Henrich, J., Heine, S. J., & Norenzayan, A. (2010). Most people are not WEIRD. *Nature*, 466(7302), 29-29.
- Henrich, J., Heine, S. J., & Norenzayan, A. (2010). The weirdest people in the world? *Behavioral and Brain Sciences*, 33(2-3), 61-83.
- Hewitt, J. P. (2001). The Social Construction of Self-Esteem. In Snyder, C. R. & Wright, Erik, *Handbook of Positive Psychology* (pp. 135-147). Oxford University Press.
- La Voy, S. K., Pedersen, W. C., Reitz, J. M., Brauch, A. A., Luxenberg, T. M., & Nofsinger, C. C. (2001). Children's Drawings A Cross-Cultural Analysis from Japan and the United States. *School Psychology International*, 22(1), 53-63.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem:

- Sociometer theory. Retrieved from <http://psycnet.apa.org/psycinfo/2001-01412-001>
- Lebra, T. S. (1992). Self in Japanese culture. *Japanese Sense of Self*, 105-120.
- Leuers = Takemoto, T. R. S., & Sonoda, N. (1998, October). 心像の自己に関する比較文化的的研究 (1) *Cross Cultural Research on the Specular Self*. Oral Presentation 口頭発表 presented at the The 62th Annual Convention of the Japanese Psychological Association English 日本心理学第64回大会, Tokyo Gakugei Daigaku. Retrieved from <http://nihonbunka.com/docs/shinzoutekijiko1.doc>
- Leuers = Takemoto, T. R. S., & Sonoda, N. (2000, November). 心像の自己に関する比較文化的研究 (6) -メディア (言語とイメージ) の違いと日米比較- *Cross Cultural Research on the Specular Self: Differences in Media (Language and Image) and comparison between Japan and America*. Oral Presentation 口頭発表 presented at the The 64th Annual Convention of the Japanese Psychological Association 日本心理学第64回大会, Kyoto University. Retrieved from <http://nihonbunka.com/docs/shinzoutekijiko6.docx>
- Markus, H., & Cross, S. E. (1990). The Interpersonal Self. In L. A. Pervin (Ed.), *Handbook of personality: Theory and research* (pp. 576-608). New York: Guilford Press.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review; Psychological Review*, 98(2), 224.
- Maslow, A. (1968). *Toward a Psychology of Being*. New York, NY, US: Van Nostrand Reinhold.
- Mead, G. H. (1967). *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist* (Vol. 1). The University of Chicago Press. (Original work published 1934)
- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62(5), 589-594.
- Morris, H. (1976). *On Guilt and Innocence: Essays in Legal Philosophy and Moral Psychology*. University of California Press.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image* (rev. Princeton University Press. Retrieved from <http://psycnet.apa.org/psycinfo/1990-98431-000>

- Said, E. W. (1978). *Orientalism*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Tajfel, H. (1982). *Social Identity and Intergroup Relations*. Cambridge University Press.
- Tsuda, S. (1992). Contrasting Attitudes in Compliments: Humility in Japanese and Hyperbole in English. *Tokai Gakuen Women's College Intercultural Communication Studies*, 2(1), 137-146.
- Williams, B., & Long, A. A. (2008). *Shame and necessity*. Berkeley: University of California Press.
- Yamagishi, T., Hashimoto, H., & Schug, J. (2008). Preferences Versus Strategies as Explanations for Culture-Specific Behavior. *Psychological Science*, 19 (6), 579-584.
- Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., ... Krendl, A. (2007). Apparent Universality of Positive Implicit Self-Esteem. *Psychological Science*, 18(6), 498.
- Yuki, M. (2003). Intergroup Comparison versus Intragroup Relationships: A Cross-Cultural Examination of Social Identity Theory in North American and East Asian Cultural Contexts. *Social Psychology Quarterly*, 166-183.
- 丸山圭三郎, 柄谷行人, 立川健二, 岸田秀, & 竹内芳郎. (1993). 文化記号学の可能性 (増補完全). 夏目書房.
- 伊藤裕子, 相良順子, 池田政子, & 川浦康至. (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 74(3), 276-281.
- 古荘純一. (2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか: 児童精神科医の現場報告. 光文社.
- 和辻哲郎. (1937). 面とペルソナ. 岩波書店.
- 安倍晋三. (2013). 新しい国へ 美しい国へ 完全版 (『美しい国へ』増補・再編集・改題書版). Tōkyō: 文藝春秋.
- 小林よしのり. (2000). 新・ゴーマニズム宣言SPECIAL 台湾論. 小学館.
- 小林よしのり. (2008). ゴーマニズム宣言NEOL. 東京: 小学館.
- 岩永定, 柏木智子, 芝山明義, 藤岡泰子, & 橋本洋治. (2013). 子どもの自己肯定意識の実態とその規定要因に関する研究, 101-108.

- 嶋田洋徳, 岡安孝弘, & 坂野雄二. (1993). 小学生用ソーシャルサポート尺度短縮版作成の試み. *ストレス科学研究*, 8, 1-12.
- 武本. (2017). 日本古来：心像的自尊心の可能性. *山口経済学雑誌*, 65巻5号, 243-257.
- 根本橋夫. (2007). *なぜ自信が持てないのか: 自己価値感の心理学* ([Kindle version]). PHP 研究所.
- 水島広子. (2013). *小さなことで左右されない「本当の自信」を手に入れる9つのステップ*. 大和出版.
- 田中優, & 高木修. (2011). 自己評価, 自己受容, および自尊心が互恵的対人関係意識を介して対人関係満足に及ぼす影響. Retrieved from <http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/4924>
- 鈴木範久. (1976). *菊と刀と十字架と*. 日本基督教団出版局.
- 青木仁志. (2009). *一生折れない自信のつくり方*. アチーブメントシュッパン.
- 高浜行人. (2015, July 4). *カウンセラー, 全公立小中へ配置めざす 中教審がまとめ*. 朝日新聞. Retrieved from <http://www.asahi.com/articles/ASH7355WGH73UTIL019.html>